

高山歯科医学院の学制・教科書・教授陣などについて*

長谷川 正 康 森 山 徳 長 石 川 達 也
高 添 一 郎 高 木 圭二郎**

1. はしがき

明治維新後、漢医法を排して西洋医学を取り入れたわが国草創期の歯科医学教育は、早急な制度の改革に追いつけずに、非常に多難な道を歩んだ。

明治16年、医術開業試験制度を定める法律が公布され、翌17年1月から実施された。その当時は、一般医学教育が政府の肩入れで非常に充実していたのにくらべて、官公立は無論のこと、私立の歯科医育機関も全然なかった。

そこで、当然のことながら歯科医術開業試験のための勉強会がもとめられるわけで、先ず小幡英之助門下生の間で、明治20年7月に作られ、『交詢会』と名付けられた。これは門下生内に限定された小グループであったが、このことが刺激となって、予備校的性格を持った講習会『歯科矯和会』が、高橋富士松、神翁金斎（実名金松）、竹沢国三郎らの音頭取りで明治21年8月に発足した。翌年『歯科講義会』、のちに『私立大日本歯科講義会』と改称し、講義録も発行した。

またこれとは別に、榎本積一を中心として、明治22年春『歯科談話会』が結成された。翌年11月には『歯科研究会』と改称し、『歯科研究会録事』を発行したが、この出版物はさらに発展して、月

刊誌『歯科研究会月報』となった。

正式な学校としては、医師石橋泉と在来家久保田豊が東京府に出願し、明治21年3月に『東京歯科専門医学校』を東京市京橋区に開校した。しかし、理由は不明であるが翌年末に廃校してしまった。その他明治27年、『愛知歯科医学校』が、渡辺敬三郎によって開校されたが、大正11年頃廃校となり、また苗賀房三郎が明治38年『京都歯科医学校』を開設した。廃校年月は未詳である。その次に明治40年開校した共立歯科医学校が、現在の日本歯科大学である。

結局、明治22年11月に東京府の認可を経て翌年1月開校した『高山歯科医学院』が、現在まで継続している歯科医育機関の嚆矢となったのである¹⁻⁶⁾。

2. 高山歯科医学院の学制と開設当初の事情

岡山藩士高山紀斎（図1）は、藩校に学び海外留学の命を受けたが、文部省当局の方針変更で果せず、慶応義塾に学んだ後私費で、1872（明治5）年米国に遊学した。たまたま歯科治療を受けたことから、バンデンボルグ博士（Dr. D. Van-Denburgh）の門に入って歯科医学を研鑽し、1876（明治9）年に受験して、米国の歯科医術開業免許を得、明治11年3月帰朝した。銀座で開業して成功を収め、宮内庁侍医局出仕となって皇族（皇后陛下・東宮殿下）の歯科診療にたずさわった。

米国式の本格的歯科医育を志した高山は、明治22年11月東京府知事より高山歯科医学院の開設認可を得て、私邸に隣接の芝区伊皿子75番地の旧スペイン公使館跡1200坪を8500円で買収し、さらに1000円余を費して家屋を修築し学校としての設備

* On the Curriculum, Text-books, Faculties etc. of the Takayama Dental College.

** Masayasu Hasegawa, Norinaga Moriyama, Tatsuya Ishikawa, Ichiro Takazoe and Keijiro Takagi (Tokyo Dental College 東京歯科大学) 本論文要旨は、第13回日本歯科医史学会総会・学術大会（1960年10月19日於日本大学会館）で発表した。



図 1 高山紀斎先生 (1850~1933)

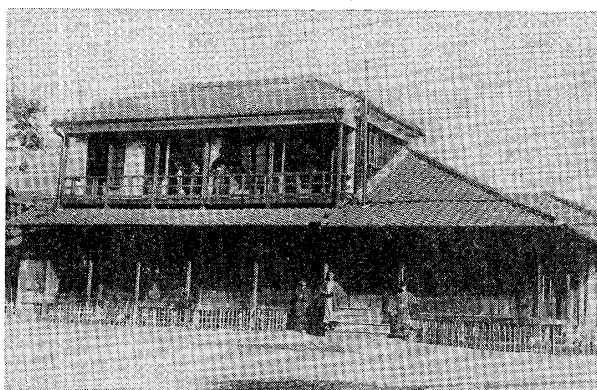


図 2 高山歯科医学院校舎 (芝区伊皿子75番地)

万端を整え、明治23年1月開校した(図2)。

開校時の講師は高山以下6名、入学した生徒はわずか9名、当時の社会全般および歯科社会の状況は前近代的であった。高山が計画し、東京府に申請したのは当時の米国で最も進歩した歯科の学制、予科を含む4学年前後期制(表1)であった。しかしその実行は、明治20年代前半の日本ではとうてい無理な話であった。そこで一ヶ月後には修業年限を2年とする単級制を採って、随時入学を許し、歯科医術開業試験の予備校的なカリキュラムに切り替え、1)物理学、2)化学、3)

表 1 高山歯科医学院学科過程旧過程表

	前 期	後 期
第1年	動物学(総論、各論) 植物学(総論、各論) 金石学(総論、各論) 物理学(物性、力学、光学、音響学) 化学(無機) 英 語 歯科汎論	(各 論) (各 論) (各 論) (熱論、磁石論、電気論) (無 機) 同 左 同 左
第2年	生理学(人体生理) 解剖学(骨格論、関節論、筋肉論) 病理学(通論、各論) 組織学(人体組織) 薬物学(総論) 外科学(通論) 内科学(通論) 化 学(有機) 英 語 歯科器械学	(人体生理) (動静脈論、神経論) (各 論) (人体組織) (各 論) (各 論) (各 論) (有 機) 同 左 (実地演習)
第3年	生理学(人体生理) 解剖学(五官論、消化器論) 組織学(歯牙組織) 薬物学(各論) 歯科治術学(総論、各論) 歯科器械学(実地演習) 歯科冶金学	(人体生理) (胸腔、発音、呼吸論) (各 論) (各 論) (実地演習) (実地演習) (実地演習)
第4年	歯科器械学(実地演習) 歯科治術学(実地演習) 歯科病理学 微生物学 臨床講義	(実地演習) (実地演習) 同 左 同 左 同 左

解剖学、4)生理学、5)病理学、6)薬物学、7)歯科解剖学、8)歯科生理学、9)歯科器械学、10)歯科冶金学、11)歯科治術学、12)実地修練科、13)歯科薬物応用とした。そしてようやく、同年7月になって生徒数も85名に達して、午後から夜間にかけての授業(月曜~金曜、土曜休日)、および日曜日の実地修練科が軌道に乗ってきた⁷⁾(表2)。

高山の高遠な理想も、現実に則した妥協的な形

表 2 日 課 表

時 曜	自二時 至三時	自三時 至四時	自四時 至五時	自五時 至六時	自六時 至七時
月 曜		生 理 学	生 理 学	歯科病理学	歯科病理学
火 曜	解 剖 学	解 剖 学	病 理 学	病 理 学	
水 曜		理 化 学	歯科冶金学	歯科器械学	歯科器械学
木 曜		歯科薬物学	歯科薬物学		歯科治術学
金 曜				歯科器械学	歯科器械学

土曜日休講，日曜日実地修練科（明治28年4月現在）

に落付き，歯科医術開業試験合格を目指すことになった次第である^{1,2,7)}。

3. 教科書および講義録

1890（明治23）年以前に出版された歯科の単行本は，教科書としては，高山紀斎著『保歯新論（上下）』（明14.6），河田・大月編『歯科全書 前編・明18.8，後編・明20.10』（ガレットソン著口腔外科学の訳）⁸⁾，高山紀斎著『歯科薬物摘要』（明19.2），小林義直訳『歯科提要（上下）』（明22.12，パライトの著書の記述）しかなかった。その他啓蒙的ものとしては，桐村克巳（明12.10），伊沢道盛（明14.1），高山紀斎（明15.11，同22.12）の歯の養生法に関する小冊子が刊行されていただけであった⁹⁾。

開校当初の高山歯科医学院にとっての最大の問題は，講義用の日本語の教科書および参考書であった。しかし上述のように，現実にパライトの歯科提要以外には適当な教科書がなかったので，各講師は，米国の原書によって口述講義し，生徒はそれを筆記しなければならなかった。それで筆記の労を不満とする生徒の訴えが続出した。こうして，明治23年10月より毎月1冊宛の『高山歯科医学院講義録』を，25年9月まで24冊1ヶ月も欠かさず刊行した。これは院内生の便宜を計るだけでなく，地方在住者や通学できない院外生約250名にも頒布して好評を拍した¹⁰⁾。（本講義録については稿を改めてその書誌学的詳細を報告する。）

同時に，あらたに教科書の編纂を併行して急ぎ

表 3 教科書及発行年月日

歯組織解剖図	明治24年1月28日出版
第5対神経解剖篇	明治24年9月3日出版
歯科汎論	明治25年9月7日出版
歯科手術論	明治25年8月8日出版
歯科器械学	明治25年9月28日出版
歯科冶金学	明治26年1月23日出版
歯科薬物学	明治28年3月10日出版

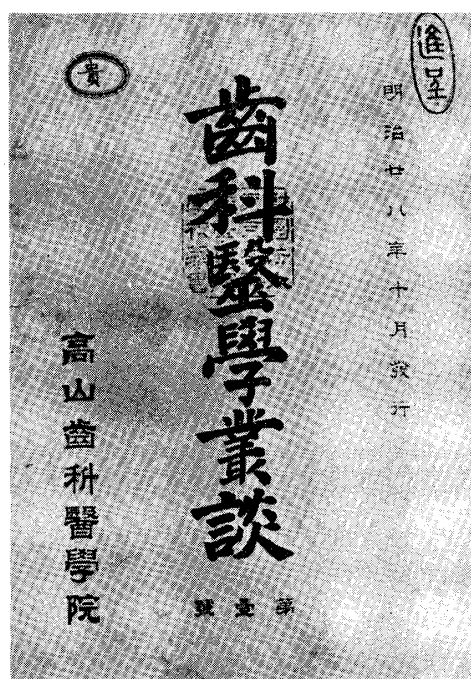


図 3 歯科医学叢談 創刊号

行い，次表の各書を明治28年春まで順次刊行した（表3）⁷⁾。その他，別に小泉栄次郎『歯科材料論』（明27.6），爪生源太郎『歯科摂生法一斑』

表 4 講師および職員（明治28年 4 月）

講 師		
歯科治術学・臨床講義	米国歯科医士	高山 紀斉
生理学・病理学	東京顕微鏡院長	遠山 椿吉
歯科器械学	ドクトル・オブ・デンタル	一井 正典
	サーゼリー（フィラデルフィア）	
解剖学	医学士	小川 勝陳
歯科器械学	歯科医士	榎本 積一
歯科病理学	歯科医士	青山松次郎
解剖学・薬物学	帝国痘苗院長	沼野孝太郎
実地科	歯科医士	爪生源太郎
物理学・化学	薬剤師	小泉栄次郎
歯科冶金学	歯科医士	藤島太麻夫
臨床講義・実地科	歯科医士	藤島太麻夫
職 員		
院 長	宮内省侍医局勤務	
幹 事	内務省医術開業試験委員	従六位 高山 紀斉
幹事補助	慶応義塾卒業生	血脇守之助
書 記		広瀬武次郎
書 記		青山 高平
		鈴木 直義

（明28.1）などがある。明治 29～32 年には、学院関係者による出版物はない¹¹⁾。

高山歯科医学院関係以外には、この期間、渡辺良斎、小島原泰民、伊沢信平らの訳・編著の数冊の出版物があるだけであった¹¹⁾。

明治33年 4 月～34年 6 月には東京歯科医学院講義録15篇、35年 4 月～37年12月に、同学院歯科学講義 9 巻が刊行され、その頃迄に大凡歯科医育教育の教科書が、一応完成したと見ることができる¹¹⁾。

いずれにしても、その母型となった明治23～28年の高山歯科医学院刊行の単行本 および 講 義 録は、当時の歯科界にあっては貴重な教科書であったことが理解できよう。

一方、明治24年に相次いで刊行された月刊雑誌『歯科研究会月報』、『歯科雑誌』や明治 26 年発刊の『歯科攻究彙報』に引き続き、高山歯科医学院々友会編『歯科医学叢談』（図 3）が明治 28 年10月に創刊された。これらの雑誌は、新知識・情報伝達の培体として活用された。その後も 2, 3 が創刊されたが、いずれも数年～10数年の短命であ

った。『歯科医学叢談』は、明治33年『歯科学報』と改題、現在まで95年間月刊学術誌として立派に命脈を保っている¹²⁾。

4. 教授陣について

開院時の講師は、院長高山紀斎のほか門下の歯科医、青山松次郎、爪生源太郎（院長の実弟）、和田忠、荒谷靖（医師免許は広島県内科外科で取得している）および薬剤師の小泉栄次郎の計 6 名である。翌年24月 5 門下生の片山敦彦が Ohio College of Dental Surgery への留学から帰朝したので、講師として歯科器械学を担当させた。片山はその後神戸および上海に移ったので、明治28年 1 月帰朝したドクトル一井正典を招き、その後任とした。

明治 28 年 4 月、『高山歯科医学院の過去及現在の状況』を発行した時点での、講師の顔ぶれと職員の構成は以下の様であった¹³⁾（表 4）。

その後明治32年末までに講師をつとめた者は、医師岩井禎三、加治木勇吉、伊藤隼三、野口英世、児玉林平があり、歯科医師としては、学院卒

業生の藤島太麻夫、野村大助、山村梅次郎、血脇守之助、広瀬武次郎らがいた¹⁴⁾。

野口が血脇に拾われて学院の学僕となり、勉勵にこれつとめて後年の世界的細菌学者となったことは、有名な話である。東京府へ提出の高山歯科医学院職員・講師記録（明治32年2月1日現在）には、「明治9年11月生れ、福島県平民。受持課目は物理、薬物。卒業学校は、東京医学専門学校済正学舎。兼務の個所、伝染病研究所助手」とある¹⁴⁾。

学院二階は二つの治療室と器械室があり、爪生源太郎が主任となって一般診療と生徒の臨床実習を行った。土曜は休診で、日曜日午前は高山院長が診療と生徒の指導に当った。診療時間は午前8時午後5時。のちに藤島太麻夫が実地指導に当たり、明治29年からは血脇守之助が担当し、午前8時より午後4時に改めた。実習患者が少なかったため、27年1月からは施療券を配布して、学用患者の招致・確保に努めた¹⁵⁾。

5. 学院の経営・卒業生の状況について

明治22年に院長高山が東京府知事、男爵高崎五六に提出した認可願書によると、当初の生徒定員200名、教員員数凡6名、授業料及経費収入支出概算では、授業料月額1円50銭（表5）、収入概算1ヶ年4,800円、支出1ヶ年概算3,400円、職員奉給1,400円、教室及器械修繕費1,000円と記載されている¹⁶⁾。

しかし第2項に記したように、8,500円で建物付の校地を買収し、1,000円余を費して修築し23年1月開校した際の、生徒数わずかに9名、7月になってようやく85名という状況であったから、とても収支のバランスなどとれていなかった。さらに追打ちをかけるように、講義録の毎月定期的な発行、教科書の出版は、当時の歯科医学志望者の購読数では、当然採算の合う事業ではなかった。すべて院長高山の、私費を注入しての孤軍奮闘の努力が、学院を支えていた。

この様な状況で、『本院は主として高尚な歯科医学を教授し治術を練習せしむる所とす』という理想に反して、止むを得ず歯科医術開業試験を目

表5 高山歯科医学院学費

入学料	金二円
授業料	金一円五十銭
実地練習費	金十銭
食費	金三円内外
舎費	金三十銭
実地練習料入学料	金一円
同授業料	金五十銭

入学料は在学証明書と同時に之を収むべし。授業料及実地練習費は毎月3日限り期分を前納せしむ。12月1日に限り半額を免ず。

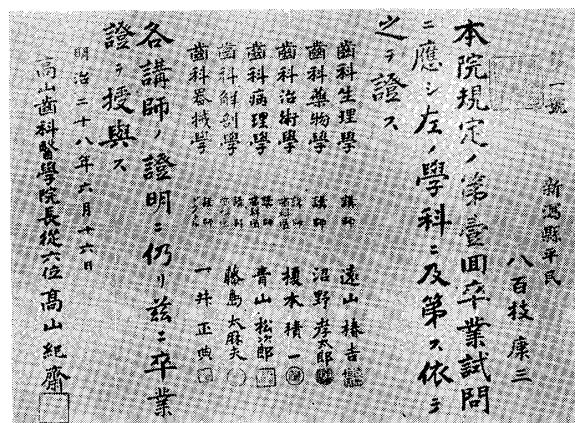


図4 卒業証書 第一号

指した妥協的教育を強いられた。ただ頼みとするところは、いかに多くの開業試験合格者を出すか、という点にかかっていた。

『高山歯科医学院の過去及現在の状況』には、この辺の事情と苦衷がにじみ出た記述がある。

すなわち、その第20章卒業生には

『本院ノ未タ創立セサルニ先チ高山紀斎ノ門下ヨリ出テテ歯科医籍ニ名ヲ列シタルモノ十六名今ヤ此等ノ歯科医ハ皆各地ニ散在シテ期道ノ為ニ鞠躬尽力セル吾国歯科ノ先進ニシテ本院創設以来間接若クハ直接ニ其幫助ヲ与ヘラレタル尠少ナカラス今姓名ヲ列記スレハ左ノ如シ（傍線本院講師）

伊藤順二 曾我敬忠 青山千代次 爪生源太郎
佐藤源太郎 織田信福 鈴木寛三 松添広大
金子孫四郎 片山敦彦 伊藤民弥 相島由之助

伊東吉六 和田忠 青山松次郎 榎本積一

以上ハ実ニ是レ本院創設以前高山氏門下ニ出ツト雖モ亦本院卒業生以テ目スルヲ得ヘク其設立後

ニ於テ内務省歯科医術開業試験ニ及第シ歯科医トナリタル本院生徒ハ左ノ如シ

明治24年4月及第

大石滝蔵、佐野貢（静岡）森甚三郎（東京）渡辺義重（新潟）

同10月及第

藤島太麻夫（岡山）野村大助（東京）大野量弥、笹田治水（愛媛）とある。

以下、25年4月及第者8名、10月及第7名、26年4月—9名、10月—5名、27年4月爪生春太郎以下7名、10月—7名、合計51名となっている。28年4月の生徒数は115名である¹⁷⁾。

ここまでは、歯科医術開業試験合格が、実質上の卒業であったのである。

明治28年春、学院幹事血脇の建議を容れて、5月に始めて卒業試験を実施し、6月16日卒業証書授与式を挙行した。開校以来5ヶ年半後のことであった。講師名・課目を列記し、各講師の証明により卒業証書を授与すと記した証書を授与した（図4）。そして卒業式の祝宴を拡大した院友会が盛大に開かれた^{18),19)}。

結局、明治23年から32年までの入学者542名、卒業者は53名、出身者で歯科医術開業試験合格者は173名に達した²⁰⁾。

6. ま と め

高山齒科学院の建学の精神は極めて高尚であった。院長高山紀斎の経歴からみれば、それは当然のことであったであろう。米国の歯科医学校が3学年制の当時、これにならい予科課程と英語教育を含めて、4年制として発足したことは大英断であった。

しかし現実には、明治20年代前半の社会情勢下では、一ヶ月を出ずして歯科医術開業試験を目指す、2年制の、しかも複式学級授業に切替えざるを得なかった。

講師や教科書にしても、ほとんど零から出発して、一つ一つ積み重ねねばならなかった。

しかし開校翌年春・秋より毎年数名ないし十名の試験合格者を出し、徐々に現実的教育の成果を挙げた。

明治26年、院長はシカゴ万国博覧会と万国歯科医学会に出席、その後米・欧の歯科教育を視察して見聞を広めた。それで高山は、帰朝後早速学院の改革に取り組むこととなった。26年4月学院に入学し、高山が外遊に際し、講演原稿の英訳を2日で完成させた血脇守之助を、学生中から学院の幹事に登用し、28年4月開業試験に合格してからは、その片腕として学院の経営に当らせた。

血脇は師の期待に答えて、あらゆる面で学院の面目を一新させた。しかし、学院は資金的には赤字続きであった。

明治30年夏、高山は附属医院の経営を血脇に依頼し経営改善を計り、また講師陣も増強して、学院収支は或程度好転したが、31年血脇の清国出張のため、再び経営が悪化した。血脇は帰国後、渡台の希望を持って退職を願い出た。

高山は、血脇を引止めて学院の一切を依譲することで、本邦唯一の歯科医学校を存続させるべく、血脇を説得して、後継者とした。

血脇は恩師の知遇にむくい、また大きな決意をもって、新しく東京歯科医学院を発足させ、これで高山歯科医学院はその使命を終えたのである。

文 献

- 1) 日本歯科医師会：歯科医事衛生史 前篇，昭和51年，東京，530-534頁。
- 2) 今田見信・正木 正：日本の歯科医学教育小史，医歯薬出版 K.K.，東京，昭和52年10月，3-14頁。
- 3) 谷津三雄：歯学史料図鑑，医歯薬出版 K.K.，東京，昭和51年11月，200-204頁。
- 4) 榊原悠紀田郎：歯の星のとき，日本歯科評論，昭和56年4月，16-21頁。
- 5) Takayama, Kisai: Dentistry and Dental Science in Japan. Dental Review 7: 818-823, 1983.
- 6) Chiwaki, Morinosuke: Recent Progress and Present Condition of Dentistry in Japan. Dental Cosmos 47: 1201-1214, 1905.
- 7) 血脇守之助：高山歯科医学院過去及現在ノ状況，明治28年4月，高山歯科医学院，10-12，20-24頁。
- 8) 3) Ibid. 195-200頁。
- 9) 1) Ibid. 545-546頁。

- 10) 7) Ibid. 12-15頁.
- 11) 1) Ibid. 546-551頁.
- 12) 1) 551-553頁, 3) Ibid. 204-206頁.
- 13) 7) Ibid. 3-4頁.
- 14) 2) Ibid. 14頁.
- 15) 7) Ibid. 24-27頁.
- 16) 2) Ibid. 8頁.
- 17) 7) Ibid. 51-62頁.
- 18) 松宮誠一編：血脇守之助伝，東京歯科大学同窓会，昭和54年，65-67頁.
- 19) 時報：高山歯科医学院卒業式，歯科医学叢談第一号，明治28年10月，40-52頁.
- 20) 1) Ibid. 534頁.

On the Curriculum, Text-Books, Faculties etc. of the Takayama Dental College

Masayasu Hasegawa, Norinaga Moriyama, Tatsuya Ishikawa,
Ichiro Takazoe and Keijiro Takagi, Tokyo Dental College

Read before the 13th Annual Meeting of the Japan Society of Dental History, October 19, 1985, Tokyo.

Since the National Licensure Law was promulgated by the New Meiji Government, Japanese dental education walked very difficult way. "Kojunkai" among the apprentices of Dr. Einosuke Obata, Japan's first licenced dentist, Shikwa-Kyowakai and Shikwa-Danwakai have started with the character of the preparation to licensure. The latter two have had meetings monthly, and later issued monthly magazines. In 1888, Tokyo Dental Specialists' School was inaugurated, however, it was discontinued within the next year.

Dr. Kisai Takayama, founder of the Takayama Dental College, was a samurai of the Okayama-clan. By the order of his feudal lord he was scheduled to study abroad. But being confronted with the Meiji Innovation, after graduated from the Keio Gijuku (University), he studied to the United States privately in 1872. By chance he met Dr. Van DenBurgh and was recommended to study dentistry under him.

After having passed the state board examination and having come back to Japan in 1878, he began his practice in Ginza, center of Tokyo. He was so successful socially, and prominent among the then dental society, the Ministry of Imperial Household invited him

as the dentist of honor for the Royal Family.

Motivated by his high ideals in dental education, and considering the social status of Japan where the dental schools were most urgently in necessity, he made up his mind to establish a high standard educational institution - Takayama Dental College. Having purchased the former Spanish consulate neighboring his residence in Isarago, Shiba-ku, Tokyo, and repaired the building and equipped as a dental school, he inaugurated the College formally in January 1890. (Fig. 1, 2)

Originally the curriculum was a U.S. style four academic year, however, only 9 applicants were enrolled into the College in January. Therefore, he was persuaded to change his initial school curriculum to conform the needs of the then dental applicants, namely, two academic years with one multiple class lecture system. Number of students reached 85 in July of the same year. Every conspicuous efforts were exerted concentrating for the purpose of passing the national licensure examination. (Tab. 1, 2)

Dental text-books written in Japanese before 1880 were very scarce. There were only "Newer Theory of Preserving Teeth, 2 Vols." by Dr. Takayama (1881), "Garretson's Oral

Surgery" translated by Drs. Kawada and Otsuki, Vol. 1 (1885), Vol. 2 (1887), Dr. Takayama's "Essentials in Dental Pharmacology" (1886), and the translation of "Parreidt's Compendium of Dentistry" by Dr. Y. Kobayashi (1889) etc. (Tab. 3)

In such a circumstance, the lectures were given orally by the translation of foreign textbooks, and the students wrote them in notebooks. Naturally the complaints for such inconveniences made it necessary to print these lectures. "The Takayama Dental College Lecture-Notes" were thus issued monthly from October 1890 to September 1892, totally 24 volumes. (The detailed bibliography of this consecutively published lecture-notes will be described in the following thesis, separately).

Parallel efforts in publishing dental textbooks in Japanese were made by the faculty. They were as the following. "Atlas of the Histology of the Teeth" (Jan. 1891), "Atlas of the Fifth Cranial Nerve" (July 1891), "Operative Dentistry" (Aug. 1892), "Essentials of Dentistry" and "Mechanical Dentistry" (Sept. 1892), "Dental Metallurgy" (Jan. 1893), and "Dental Pharmacology" (March. 1895). (Tab. 3)

Beside these, quarterly journal "Shikwa-Igaku-Sodan" (metaphrased as Multiple Opinions in Dentistry) started publication from October 1895. This was the forerunner of the present-day "Shikwa-Gakuho", official publication of the Tokyo Dental College, which became a monthly journal since 1900. (Fig. 3)

Faculty of the college when started in January 1890 were six. Drs. Kisai Takayama,

Matsujiro Aoyama, Gentaro Uryu, Tadashi Wada, Yasushi Araya and pharmacist Eijiro Koizumi. In May 1891, Atsuhiko Katayama, D.D.S., came back from the Ohio College of Dental Surgery, and began lecturing mechanical (prosthetic) dentistry.

The faculty of the college, just before the first commencement performed in June 1895, were shown in Table 4.

After that, the following persons joined to the faculty until march 1900. Drs. Teizo Iwai, Yukichi Kajiki, Shyunzo Ito, Hideyo Noguchi, Rinpei Kodama (medical doctors), and as dentists, Drs. Tamao Fujishima, Daisuke Nomura, Umejiro Yamamura, Morinosuke Chiwaki, and Takejiro Hirose. It had been a popular story that Dr. Hideyo Noguchi, the then poor applicant of the medical licensure, was assisted by Dr. Chiwaki, superintendent of the college, later became a world famous bacteriologist.

Before the first commencement, the passing of the licensure examination was the actual graduation of this College. The number of the students who passed the examination were 4 in April and 5 in October 1891, 8 in April and 7 in October 1892, 9 in April and 5 in October 1893, 7 each in April and October 1894, and which totalled 51 licencees. The number of students in April 1895 were 115.

In summing up, the total students enrolled during 1890-1900 were 542, and those who graduated the College after 1895 were 53. And the total licencees from the College reached up to 173.

《Explanation of Figures and Tables》

Fig. 1. Dr. Kisai Takayama

Fig. 2. School Building of Takayama Dental College

Fig. 3. The First Number of Shikwa-Igaku-Sodan Oct. 1895

Fig. 4. Certificate of Graduation No. 1.

Tab. 1. Original Curriculum of the Takayama Dental College.

Tab. 2. Time-Table of Lectures.

Tab. 3. Text-Books and Date of Publication.

Tab. 4. Faculties and Staff of the College.

Tab. 5. Expenses of Students.